軽井沢シンフォニックコーラス
TUTTI 第５９号
2025.11.07

私のクラシック音楽鑑賞歴

佐々木 毅（ テノール ）

東京から軽井沢に引越して４年ほどが経ち、何か新しい趣味でも始めようかと思案していたところ、ご近所の小松夫妻にお会いする機会があり、軽井沢シンフォニックコーラスへお誘いいただきました。歌といえばカラオケ経験（最近はやっていません！）しかなく、上手く歌えるか、それ以前に声が出るか不安もあったのですが、思い切って参加したことで楽しい体験をさせていただいています。皆さんに合わせていけるよう頑張りたいと思いますので、これからもよろしくお願いします。

今回は自己紹介として、私の音楽趣味について書かせていただこうと思います。

歌う経験は無いに等しいのですが、一方聴く方はクラシック音楽鑑賞歴は 50 年以上となります。クラシック音楽好きだった父親(94 歳で健在！)の影響なのか、小学生低学年から小さなレコードプレイヤーで聴き始め、この頃に家にあった SP レコードの中で覚えているのはワーグナーの「タンホイザー大行進曲」。冒頭の軽やかな旋律が、幼少期の鑑賞の記憶となっています。

その後父親が奮発して４チャンネルステレオを購入したこともあり、それからは毎月に１度か２度、仕事帰りの父親と駅ビル（JR 蒲田駅：東京の南のはずれです）で待ち合わせをし、駅ビルの中にあるレコード屋さんで１～２枚、自分の選んだレコードを買ってもらうようになります。 そして、一緒にご飯を食べて帰るという 父と子のコミュニケーションが続いたのでした。この頃は初心者がよく聴くドボルザークの「新世界交響曲」を始め、モーツアルト、ベートーベン、チャイコフスキー、メンデルスゾーンの交響曲、３大ピアノ協奏曲、３大バイオリン協奏曲など、どなたでも一度は耳にしたことがあるような有名曲を中心に聴いていました。とくに「新世界交響曲」とチャイコフスキーの交響曲第 6 番「悲愴」は繰り返し聞いていた記憶があります。

中学生になるとクラブ活動中心（小柄ながらバスケットボール部）となり父親とのコミュニケーションは少なくなりましたが、主に古典派からロマン派の作曲家の管弦楽曲の鑑賞がメインとなっていた時期でした。

高校に進学すると、それまでほとんどクラシック音楽しか聴いてこなかった私は、友人の音楽話に全くついていけないことに気が付くことになります。それに驚愕した私は「これはいけない」と思い、流行りの歌謡曲や友人が傾倒する音楽にも少し興味を

もって聴くようになりました。クラシック音楽以外のジャンルが広がった時期ですね。

クラシック音楽鑑賞の趣味では仲間ができないままでも、大学生時代には鑑賞する曲に少し変化が出てきたと思います。それまでメインだったロマン派の管弦楽曲に飽き、次第にドビュッシーやラベルなどの印象派の管弦楽曲（ドイツ系からフランス系への移行？）を鑑賞するようになっていきます。また、器楽曲としてベートーベンやショパンなどのピアノ曲も聴くようになったのもこの頃です。（ショパンの曲を弾けるようになりたい願望から楽譜を買ったりも）

社会人になって初めて実家から離れて一人暮らしの時に、最初のボーナスでPIONEERのシステムコンポを購入。その後アンプやプレイヤーは何度も入れ替わる中、スピーカーだけは今でも自宅に鎮座して現役で音を出してくれています。社会人以降はジャズやフュージョンなども鑑賞レパートリーになってきましたが、クラシック音楽については聴いて心地よい美しさよりも、次第に新しい試みや複雑な要素を持った楽曲を好んで探すようになり、ブルックナーやマーラーの長大な交響曲、加えて近代から現代の作曲家の楽曲にどんどん興味が移行することになりました。ストラビンスキーのバレエ音楽（「春の祭典」に衝撃！）、プロコフィエフの交響曲や協奏曲（諧謔の新感覚！）、バルトークの協奏曲や弦楽四重奏曲（斬新さの発見！）、ショスタコーヴィチの各作品（交響曲手法に驚愕！）、ペンデレツキの各作品（代表作に唖然！）などなど。（好みが東欧やロシアの作曲家へ向かった時期？）

そして、「死んだ男の残したものは」を作曲した武満徹の、尺八とオーケストラによる「ノベンバーステップ」も感銘を受けた曲の一つ。近代及び現代作曲家については比較的多く聴いており、自分でもこの分野のオタクかなと思っています。

さて、40代までは声楽曲にほとんど興味がなく、声楽が入る曲としてはベートーベン合唱交響曲やモーツアルト「レクイエム」くらいしか聴いていませんでした。しかし、50代になると人の歌声の美しさに目覚めて、オペラのアリア等も少しずつ聴くようになり、その延長で「オペラは総合舞台芸術なのだから劇場に見に行かなければ」と思い立ち、東京オペラシティコンサートホール（西新宿）にも足を運ぶようになります。そこではリヒァルト・シュトラウス「サロメ」、プッチーニ「蝶々夫人」「トスカ」「ラ・ボエーム」、ベルディ「椿姫」などを鑑賞し、オペラ好きになってしまいました。今では劇場に行く機会も少ないのでDVDで我慢しています。（オペラだけでなくストラビンスキーのバレエ音楽等もDVDで所有）

これまで数多くの作曲家を鑑賞してきた中で、今では一番好きな作曲家はショパンで、聴くだけに飽き足らず少しピアノを弾いたりもします。クラシック音楽がお好きな方がいらっしゃいましたら音楽談義など出来たら幸いです。また、聴いていない作品もまだたくさんありますので、ご存じの方には教えていただきたいとも思います。バッハ、シューベルトなどの大作曲家も多くの作品があるにもかかわらず後回しにしてきました。モーツアルトやベートーベンも一部の交響曲以外はあまり聴いていません。これからもクラシック音楽を聴き続けていきたいと思います。

「スカラベ」は「ふんころがし」

大林義博（ テノール ）

南フランスの貧しい農家に生まれたアンリ・ファーブル（1823～1915）は 47 歳を過ぎてから昆虫の細かな生態観察を始め、56 歳で『昆虫記』第一巻（1878）を、84 歳で全十巻が完成しました。非常に多くの昆虫が取り上げられている内容ですが、特に「ハチ」類と「糞虫」に関するものが特出されます。

「糞虫」には、糞の中にもぐりこんでそのまま食べるもの、糞の下に縦穴を掘って、その下に運び込むもの、ざっくりと切り取って球形にして、よその場所へ転がしていくもの・・・など、コガネムシ科の昆虫は全世界に 30,000 種いると言われています。



■ギザギザスコップのような

糞虫の中でも体長約３㎝と大きなタマコロガシはタマオシコガネ、フンコロガシと名付けられ、その習性が面白く紹介されています。『この虫はヒツジやウシ、ウマやラクダなど草食獣の糞をギザギザの付いたスコップのような頭でけずりとり、前足 2 本で後ろへ送り、後ろの 4 本の足でギュウギュウおにぎりのように握りしめ、豆粒位の玉は最後には小さなリンゴ位になります。次は後ろ足２本で玉を逆立ちをして押し始め、坂道を上の方に押し上げていきます。途中で下の方へ転がってしまうことも。でも 10 回でも 20 回でも同じことを繰り返し、坂の上の方へ転がしていきます。方向は太陽の動き、星の明かりを頼りにしているとも言われています。玉は遠くまで運ばれてきました。でも安心はできません。「どろぼう」です。ブーンと一匹のタマコロガシが飛んできて、転がしているタマコロガシの足をすくい、横取りです。つかみ合いの喧嘩になりましたが、こんなときは大抵 どろぼう の方が強いのです。タマコロガシが運んでいるともう一匹やってきて「ぼくも手伝うよ」と言って前足でひっぱり２匹が前と後ろになって、今度は親切なタマコロガシですね・・・本当にそうでしょうか？ 安全な場所を見つけると穴を掘り始めました。人間の握りこぶし位の大きさです。穴を掘っていた玉の持ち主が穴から出てきました。「あれ、玉がない‼」さっき手伝ったタマコロガシが向こうで転がしています。やっぱり どろぼう でした。タマコロガシは どろぼう だらけです。やっと取り返したタマコロガシは穴の中に玉を入れ、自分も入って穴の入り口を掘った土でふさぎ、誰にも見つからず安心して糞を食べ始めました。なんと 12 時間以上も食べ続け、針金のような糞は 3m 前後もあります。』（糞を食べて糞を出す・・・糞虫）



■お手伝いどろぼう

今から 4,000 年以上前、古代エジプトで神聖視されたスカラベ（ 古代エジプト語 ）

は「聖玉押し黄金（ひじりたまおこがね）」（フンコロガシ、タマコロガシ）です。「天空を駆ける太陽」と「果てしない大地の風景の中で自分の身より大きな糞玉を一生懸命転がす姿と重ね合わせ」た太陽神「ケプリ」の頭部はスカラベです。神秘と幸運のシンボルと、死と再生の象徴としてスカラベを形どった宝玉や石造物などミイラの胸のところに置かれたりしました。現在でもペンダントやイヤリングなどで活かされています。

フンコロガシのメスはヒツジの糞で洋ナシ状の糞球を作り、土の中に埋め、タマゴを一個生みます。太陽の熱でやがて幼虫になり、糞球を食べてサナギに、やがて大人になったタマコロガシが地面から現れます。ファーブル以前は細かな生態が調べられていなかったので、古代エジプト時代にはいきなり土の中から現れたスカラベを見て、再生の象徴としてあがめられたのではないでしょうか。

【編集後記】

☆シンフォ新人の佐々木さんは小松ご夫妻のご近所さん。小松さんが庭仕事をしていると、佐々木さんの奏でるピアノの音色が聞こえてくるそうです。来年１月の新年会で佐々木さんと同じテーブルにつく方々は、佐々木さんと音楽談議をなさってください(*^^*)

☆シンフォの博物学者・大林さん久しぶりの登場です。フンコロガシのフン闘を活動弁士のように解説してくださり、同情したり笑ったり。その虫が古代エジプトでは聖なる昆虫「スカラベ」だったと初めて知りました。これだから TUTTI 発行をやめられません。（岡田）